

# ヤングケアラー をどう支えるか 当事者の声と支援活動

介護を必要とする家族のケアを大人同様に担う子どもたち、ヤングケアラー。学業に支障が出るなど厳しい環境の中で、家庭維持のため欠かせない役割を担い、困難を抱えることも多い。支援体制や社会の理解が不十分ななかで市民に何ができるのか。当事者の声や先進地イギリスの活動例等をとおして考えてみた。

【特集チーム】

永井 美佳、濱島 淑恵、牧口 明、南 多恵子、百瀬 真友美



## ●家族の誰をケアしているか・どんなケアをしているか

	大阪 (n=270)		埼玉 (n=206)		大阪 (n=265)		埼玉 (n=204)	
	要ケア家族	人数	要ケア家族	人数	ケアの内容	人数	ケアの内容	人数
1位	祖母	129	祖母	93	1位	家事	家事	95
2位	祖父	61	母	49	2位	力仕事	感情面のサポート	85
3位	母	55	祖父	43	3位	外出時の介助・付き添い	力仕事	78
4位	弟・妹	43	弟・妹	32	4位	感情面のサポート	外出時の介助・付き添い	61
5位	父	27	父	17	5位	病院や施設へのお見舞い	病院や施設とのやりとり	35

(いずれも、上位5項目・複数回答可。nは分析対象者数)

2016年に大阪府立高校10校(約5000人)、18年に埼玉県立高校11校(約4000人)等の協力を得て濱島淑恵らの研究チームが実施した高校生への質問紙調査より。

# ヤングケアラー——家族のケアを担う子ども・若者たち

濱島 淑恵  
大阪歯科大学医療保健学部准教授

## 「ヤングケアラー」との出会い

「親の介護のため大学を辞めて、実家に帰らないといけないかもしれない」

十数年前、4年生になろうとする学生がこう言ってきたことがある。私は驚き、どうにか1年間持ちこたえられないか話をした。しかし、周囲の反応はさまざまで、「大げさな」「構ってほしただけでは？」など冷たいものもあった。家族のケアを担う子ども、若者を「ヤングケアラー」と呼ぶことは、当時はまだ知られていなかった。かくいう筆者も2010年、イギリスで開催された国際会議でこの言葉を初めて知った。1ページの2調査は、そこでの経験をもとに実施したもので、子ども自身に尋ねたヤングケアラーに関する調査の先駆けとなった。

## ヤングケアラーの定義

日本にはまだ正式な定義はなく、さまざまな定義が示されている。本稿では「疾病、障害等を有する家族がいるために、家事、介護、感情的サポート

ト、年下のきょうだいの世話、通訳などのケアを担っている子どもまたは若者」として話を進めたい。年齢については18歳未満とする報道もあるが、国によって異なり（イギリスは18歳未満、オーストラリアは25歳まで）、日本ではこれから議論する必要がある。

ヤングケアラーの具体例を挙げると、認知症の祖父母の介護、見守りをする、精神疾患を有する母親を支える、障害を有する家族の世話をする、日本語を第1言語としない親の通訳をするなどさまざまである。その他、家事、年下のきょうだいの世話をするケースも多く、さらにアルバイト等で家計を支えるケースもある。

## ヤングケアラーの実態

高校生に対する三つの質問紙調査の結果より 子ども自身に対する実態調査は、1ページの2調査と、埼玉県が実施した20年の調査（以下、埼玉県調査）がある。埼玉県調査は日本初の行政による調査で約5万人の高校2年生を対象としており、その結果は筆者らの調査と類似していた。

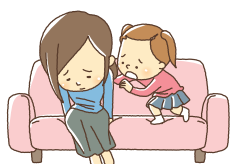
これらの調査では、ケアの対象は祖父母、母が多くみられた。特に筆者らの調査では、母親の場合、精神疾患、精神障害、精神的不安定であるケースが多かった。また、父親、きょうだいのケアをしている者が一定数いたことも重要な結果である。

ケアの頻度、時間は毎日が最も多く（約3割）、筆者らの調査では、週4、5日以上とほぼ毎日ケアを担っている者が約4割にのぼった。1日のケアの時間は、1時間未満が最も多かったが（約3割）、一方で4時間以上という長時間のケアを担っている者も1、2割程度いた。埼玉県による調査では、ケアの時間が長期化するほど悩みを抱える者が多くなることが示されている。

ケアの内容は（調査によって選択肢が異なるが）家事が最も多く、ほかに感情的サポート、外出時の介助・付き添い等が挙げられた。ヤングケアラーの語りでも家事はよく登場し、洗濯、掃除、食器の後片付け、調理などがある。普通の手伝いではないかと思うかもしれないが、まだスキルもない子どもたちが、責任をもって、毎日、必ず

## ヤングケアラーがしているケアの例

イラスト・多田 文彦



感情的サポート（なぐさめる、愚痴を聞く、イライラをぶつけられる等）



家事をする（掃除、洗濯、食器の後片付け、食事の準備等）



きょうだいの世話をする



通院や外出に付き添う



身体介助（入浴、排せつ、食事等のサポート）をする

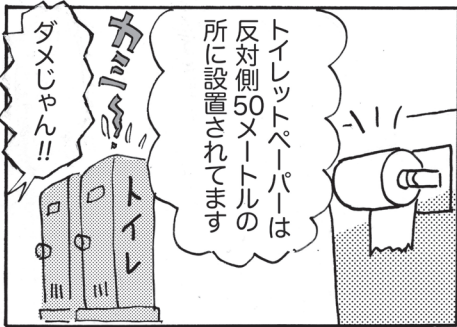
# うおろ君の 気にな〜る ゼミナール

Vol. 116

## 「スファイア基準」 って？



まんが ■ ラッキー植松



近年の災害では、避難所は逃げ込む場所ではなく、何カ月も生活する場になりつつある。しかし、学校などの空間で「生活」するには、さまざまな支援が必要で、それらが互いに調整され、協働しなければ、せっかく助かった人々が毎日の生活で困難を感じてしまう。

「調整と協働に基づいた災害支援を実現するために何をすればいいか」をまとめたものがスファイア基準である。スイスに拠点があるNGOスファイアがハンドブックを発行しており、日本語版もネット公開されている。ハンドブックは国連組織、赤十字、世界中のNGOが協働し作成されている。

例をあげると、「だれもが安心して使えるトイレ空間とはどのようなもので、どのようにすれば作れるのか」が述べられている。日本では、「トイレの数は男女比が1:3」といったことが書かれている本と認識されている傾向がある。しかしこのような解釈に基づいた支援では、災害弱者が守られにくい、地域住民の自主性が尊重されにくい、長期的に支援者任せの文化に結びつく——ことが危惧される。スファイアハンドブックは、支援する側の責任と、受ける側の権利を教えてくれ、多くの支援団体に関わる災害現場での調整と協働を促す資料である。

宮崎大学医学部看護学科教授 人道支援における質の保証と説明責任 公認トレーナー  
原田 奈穂子

## ウォロ・バイダー、 いかがでしょうか?

ウォロ2年分(12冊)を  
挟み込めるバイダー  
(1冊500円+送料350円)です。  
お問い合わせはウォロ編集部/office@osakavol.orgまで





# 「EARTH」

喫茶店「喫茶店ばい何か」。常連客の一人はこういつた。

大阪メトロの「動物園前駅」からすぐ。バス通りに面した立地にもかかわらず、看板らしいものを出していないため、つい通り過ぎてしまいがち。店頭のチラシラックや貼り紙に気づいたら、イベントも開催してお酒も飲めそうなカフェだと初めてわかる。ライブを聴きに、展示を観に、時折開かれる路上パフォーマンスを見物しに……。さまざまなきっかけで店に通う客たちは、その「何か」とりこになった人たちだろう。

店主の寺川大地さんは神戸のアート&カフェスペースなどを経て、2012年にEARTHを開いた。20席弱の店内を一人で切り盛りしている中で、他の人から大変だねといわれるが、「意思決定や判断が自由にできるのがいい」と話す。オーダーごとに豆を挽いて一杯だてられるコーヒーは300円。飲食物の持ち込みはフリーで、ワンドリンク制などの決まりごともない。ライブ、パフォーマンス、絵や写真の展示……。寺川さんが賛同できるイベント企画には店内スペースを提供し、必要があれば音響機材なども貸し出す。外部イベントでは、地元西成が舞台の作品を中心に上映される「西成ドラゴン映画祭」に、チケット販売などで協力してきた。

知らない人同士でも気軽に会話できるような距離感を保つ席の配置。大手チェーンカフェのように静かに本を読んだり勉強したりするには向かないが、店にどうう人たちの世間話のなかから、新しい「何か」が生まれそうな空間だ。

編集委員 村岡正司



右／「喫茶店ばい何か」として気づかない外観  
左／2020年12月に開かれたイベント「福岡ちえぼう個展 かつふじたまこ CD発売記念ライブ」

撮影＝江里口 暁子

## EARTH

大阪市西成区太子1丁目3-26 電話 070-1340-1212  
営業時間 13:00～23:30頃 不定休

## 同調圧力

望月衣塑子 前川喜平  
マーティン・ファクラー

角川新書

### 同調圧力

望月衣塑子、前川喜平、マーティン・ファクラー 著  
KADOKAWA / 角川新書、2019年6月  
本体840円＋税

東京新聞社会部記者の望月衣塑子氏、元文部科学省事務次官の前川喜平氏、それに元ニューヨーク・タイムズ東京支局長のマーティン・ファクラー氏が、メディアや教育現場における「同調圧力」についておのおのの体験を踏まえながら語っている。巻末には、映画「新聞記者」の劇中座談会も収録。

望月氏は菅義偉内閣官房長官（当時）の記者会見での質問に対し、事実に基づかない質問は慎むよう官邸側から「圧力」を受けた過去を持つ。その「圧力」に対し、同僚やメディア仲間などと抗議した当時のいきさつや記者クラブ

制度の問題点などを指摘。報道の原点に立ち返れば、同調圧力が頭をかすめることはないと言及。

前川氏は文部科学省にあって組織の論理に従いながらも、ときには面従腹背で精神的に仕事をし、思い入れのあった教育機会確保法などの成立に尽力した。教育現場や省内における圧力や忖度に触れながら、自ら考える力を育てる教育の必要性を訴える。

ファクラー氏はアメリカの報道が、アクセス・ジャーナリズム（権力者から情報もろう報道方法）から調査報道へとシフトしていった背景を、ベトナム戦争やイラク戦

争などをめぐる報道の失敗やその反省から生まれてきたものだと説明。メディアと政権の適切な距離感について主張する。

同調圧力は行政やメディアといった縁遠い世界のことでなく、自身の地縁や血縁、学校、職場などでも起こりうる身近なことである。同調圧力から抜け出し、少しでも言いたいことが言え、自分らしく生きていくためのヒントが本書から得られるはずだ。

編集委員 阿部 太極

～市民視点のドキュメンタリー映画を紹介する

今月の作品  
「イヨマンテ — 熊送り」



総監督・脚本：姫田忠義  
企画・製作：  
民族文化映像研究所  
1977年 | 103分 |  
北海道沙流郡平取町二風谷  
DVD貸し出し問い合わせ先  
民族文化映像研究所  
minneiken@alpha.ocn.ne.jp

©一般社団法人民族文化映像研究所

イヨマンテ(注)(熊送り)は、  
アイヌモシリ(人間の国)からカムイモシリ(神の国)へ熊の魂を送り返す儀式である。今から44年前の1977年、萱野茂(1926～2006)が若いアイヌたちにアイヌ文化をきちんと伝えたいという思いから、北海道の平取町二風谷でイヨマンテが執り行われた。この作品は、姫田忠義(1928～2013)が当時代表をつとめていた民族文化映像研究所によって、その一部始終を記録したものである。

イヨマンテはアイヌの自然観や生命観が凝縮されており、最大かつ最高の行事として大切にされてきた。劇中、萱野がこう語っていた。

(注)アイヌ語で「イ」は、それ、「オマンテ」は、送る、を意味する。

る。

「アイヌの熊に対しての考え方」というのは、熊は神の国からアイヌのところへ毛皮の着物を着て、肉の食べ物を背負って、熊の胃という万病の薬を持ってきてくださる。だから食べさせてもくれる、着せてもくれる、葉までというわけで、大切に神様としてまつるわけですね。その神様の子どもを1年間養っておいで神の国に返すときに、できるだけ美味しいご馳走を、神の国で住んでおる父神・母神へ背負わせて返すことによつて、アイヌの村であったと同じような大宴会がもたれると。それで二度も三度もアイヌのところへ幸せをもたらしてくれるように、

●今月の館主

いまいともき  
今井 友樹

1979年岐阜県生まれ。日本映画学校(現・日本映画大学)卒業後、日本各地の基層文化を映像で記録・研究する民族文化映像研究所に入所。所長の姫田忠義に師事し、映像制作に関わる。現在、株式会社工房ギャレットの代表を務める。



イラスト：杉浦 健

ういいう言付けを持たせて神の国へ返す」

しかし、イヨマンテは野蛮な行為であるとして、1955年北海道知事名の通達によって禁止されてしまふ。本作はその禁止の最中に行われたイヨマンテであり、作品に登場するアイヌの人のびとからはアイヌ文化を継承しようとする気概がありありと伝わってくる。

イヨマンテ禁止の通達は、昨年ようやく撤廃された。この年に公開された話題となった劇映画「アイヌモシリ」には、アイヌの血を引く少年がイヨマンテを通じてアイヌ文化の神髄に触れる様子が描かれている。劇中では、重要な部分にこの「イヨマンテ — 熊送り」の映像も一部登場する。当時イヨマンテを行ったアイヌの人たち、記録を残した人たちの文化継承に新たな息吹きを与える作品となっている。



カフェから時代は創られる

飯田美樹 著  
クルミド出版、2020年9月  
本体1800円+税

春、筆者があるカフェの店主と交わした会話をきっかけに知ったミュージシャンの曲想を友人たちに紹介したところ、次々に共感が広がって他の友人や家族などに薦め、東京、神戸、沖縄をむすぶコンサートの企画にまで発展した。店主や常連客なども参加して昨秋第1回目の開催が実現し、さらに新たな交流が生まれた。そんなカフェ発のつながりの不思議さを実感していたころ、この本に出合った。

「カフェはただコーヒーを飲みに行くための場ではない」「出会った誰かと有意義な会話が生まれ、発展していった

とき、予期せぬ何か生まれ、人生が変わる場」。みずからもパリ留学中、カフェ通いをした著者は、フランス革命のような社会変革やさまざまな芸術運動がパリのカフェから芽吹いたことを知り、研究に没頭するようになる。

本は20世紀前半のパリのカフェから輩出された芸術家や作家たちに焦点をあて、カフェという「場」が彼らの成功にどう作用したかをつづさに追う。興味深いのは当時のカフェの存在が現代とは違い、属する環境に居づらさを感じたり、居場所を失ったりした者が通う場としてとらえられていたこと。老人、学生、

亡命者、移民、そして詩人や役者などの自称芸術家たちが常連客の大半だったのだ。

当時とシチュエーションは違いこそすれ、現代のカフェにもそれを補って余る共通点があるようだ。客同士の連帯感、常連客を大切にす店主、拠点としての居場所、予期せぬ出会いがもたらすチャンス……。キーワードは豊富にある。最近話題の「サードプレイス」的なカフェの存在意義についてのコラムなども盛り込まれ、カフェを訪れることが今までより一層楽しくなる一冊だ。

編集委員 村岡 正司